

東北方言における極限のとりたて助詞サエ

竹田 晃子

1. 目的と方法

本稿は、東北方言における極限のとりたて助詞サエ類について、語形のバリエーションとその地理的分布を明らかにすることを目的とする。

三井はるみ(2003)によると、「共通語の「さえ」は「極端なものごとを提示し、より一般的な場合について類推させる」意の「極限／類推」を基本用法としながら、「ある結果をもたらすためにはそのことだけで十分である」意を表す「十分条件」、「すでに存在する物事に付け加えて述べる」意の「添加」という周辺の用法を合わせ持つ。(p.131)」とあり、方言における用法は十分条件に偏っていることが指摘されている。また、日本語方言における極限のとりたて助詞には、共通語と同形式のデモ、サエ、モノ他に、ダッテ(東日本)、カテ(近畿)、ダニ(山陰)、ジャチ(高知)などがあり、地域差があることが指摘されている。特に東北方言のサエ類は、前接する要素に動詞連体形や否定形、条件節があらわれることがあるが、これをとりあげたものは少なく、全体的な把握が遅れている。

以上をふまえ、本稿では、全国を対象にした調査資料から極限のとりたて助詞サエ類の全国分布を概観した後、東北方言を対象にした明治から昭和にかけての調査資料をもとに図表を作成しつつサエ類の語形のバリエーションと地理的分布を概観し、最後に東北方言における特徴をまとめる。

2. 全国方言における分布

全国分布資料として、次の資料を参照する。

①図1 国立国語研究所(1981):第33図「これさえ(有ればいい)」

②図2 平山輝男編(1992):分野18-項目16「これさえ(あれば大丈夫だ)」

③図3 国立国語研究所(1989):第46図「子どもでも(知っている)」

①の『方言文法資料図集(1)』は、文法事象に関する約300項目について、全国163地点の生え抜き高年層184名を対象に、1977年に面接調査を行って得られた

調査結果を地図化した資料である。図1の例文は、条件節にサエ類が用いられる十分条件の用法である。これによると、サエ類が本土に広く分布することがわかる。また、サエ類の変化した形にケ／カなどが付いたサケ／セカ／シカなどの形式が、岩手県・宮城県の間境付近（旧伊達藩の北部）と山形県、九州西南部から奄美大島・沖縄本島に分布することがわかる。

②の『現代日本語方言大辞典』は、音韻・アクセント・文法・語彙・その他に関する2300項目からなる「方言基礎語彙」に基づいて、全国72地点の生え抜き高年層話者490名を対象に、1974-1988年に面接調査を行って得られた調査結果である。これを新たに地図化し、図2に示した。図2の例文も図1と同様の用法で、分布もほぼ同様、全国にサエ類がある。また、サエ類の変化形にケ／カなどの付いたサケ／サカ／シヤカなどの形が、秋田県・宮城県・九州東部・南部と五島列島に分布している。

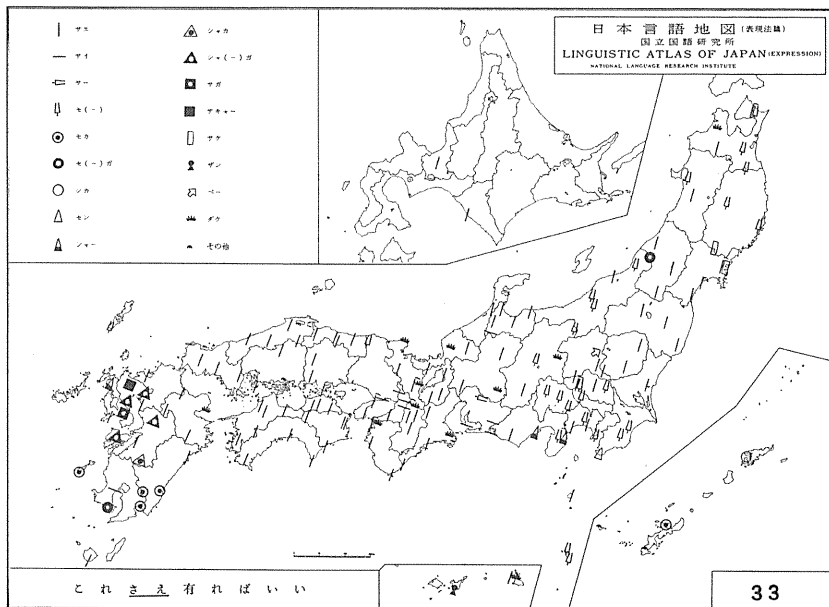


図1 これさえ(有ればいい) (『方言文法資料図集(1)』33図より)

東北方言における極限のとりたて助詞サエ

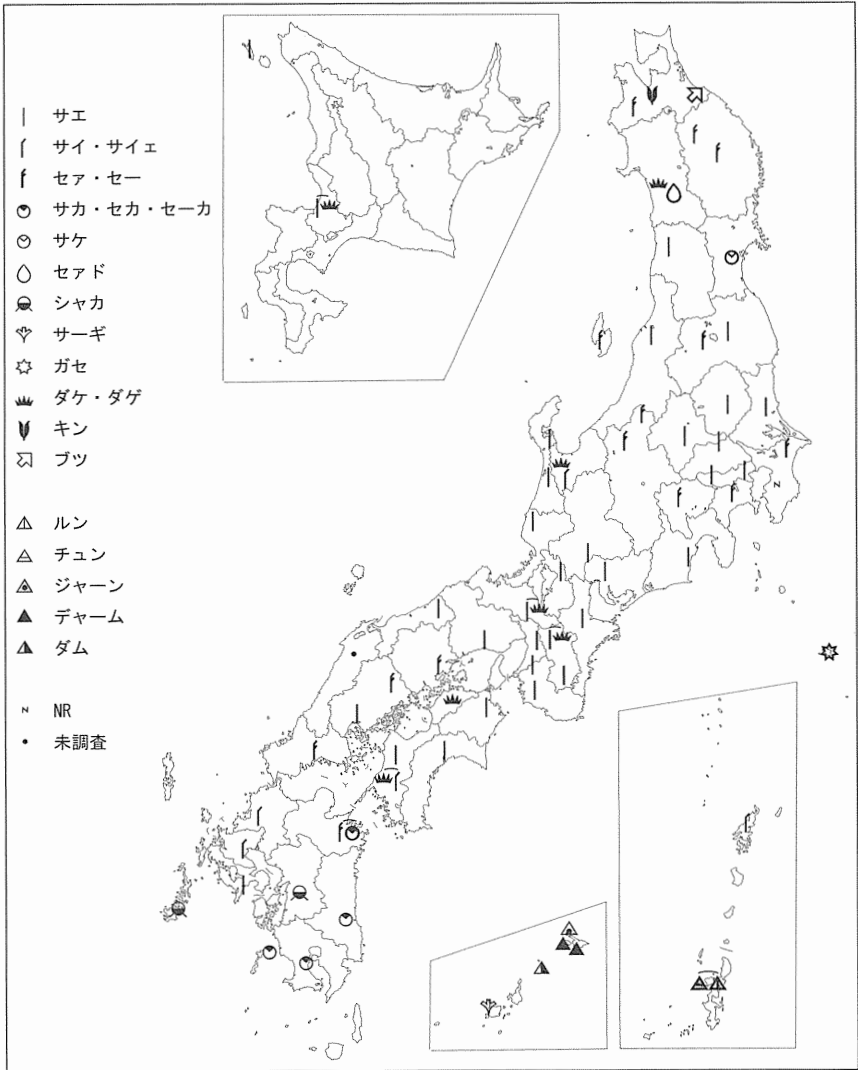


図2 これさえ (あれば大丈夫だ) (『現代日本語文法大辞典』第1巻の地図化)

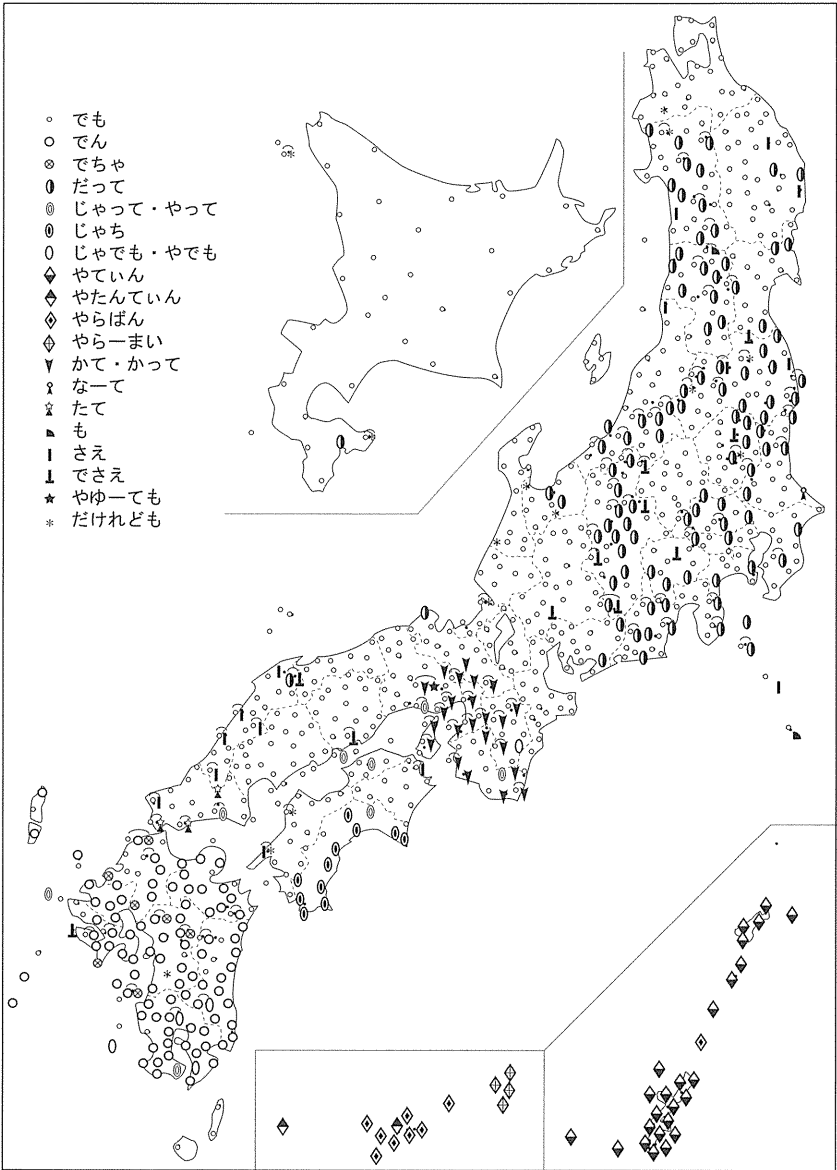


図3 子どもでも知っている (『方言文法全国地図1』46図の略図)
(三井はるみ (2003) p.125 より)

③の『方言文法全国地図』は、文法事象に関する267項目について、全国807地点の生え抜き高年層話者901名を対象に、1979-1982年に面接調査を行って得られた結果である。図3は三井(2003)による略図で、極端なものごとを提示してより一般的な場合について類推させる意を表す共通語例文の「でも」に対応する語形を地図化したものである。サエ/デサエなどのサエ類は、島根県などの中国地方にややまとまっている他は、全国に点在している。三井(2003)は、他の資料(方言集や記述研究等)ではサエ類が全国にみられることと③でのサエ類の回答が少ないことを比べ、質問の際に共通語例文「でも」を用いてたずねたためにサエ類が回答されにくかった可能性を指摘している。

以上の図1～図3について東北地方に注目すると、ほぼ全域にサエ/セア/セーなどのサエ類が回答されており、基本的な語形であることがわかる。また、図1の旧伊達藩地域(岩手県から宮城県にかけて)と図2の宮城県においてサケ、セーガが図1の山形県、セアドが秋田県で回答されている。

3. 東北方言におけるサエ類の分布

3.1 資料

東北方言を対象とした調査資料として次の三つを取り上げ、サエ類の語形のバリエーションと分布をみる。調査年代に違いがあるが、今は触れない。

- ④ 国語調査委員会・第2次調査報告(岩手県の稿本):1908(明治41)年調査
- ⑤ 小林好日氏による東北方言通信調査資料:1941(昭和16)年頃調査
- ⑥ 国立国語研究所「全国方言文法の対比的研究」:1966-67(昭和41-42)年調査

④の資料は、明治政府文部省における国語調査委員会によって1908(明治41)年に実施された第二次口語法調査についての調査結果をまとめた稿本である。第一次調査の結果は『口語法調査報告書』(1906(明治39))、『口語法分布図』(1907(明治40))として刊行されたが、第二次調査の報告書類は1923(大正12)年9月の関東大震災によって消失したことが知られている。ただし、その報告書の稿本の類が地方の公立図書館などに保管されている場合がある。本稿で扱う資料は、岩手県立図書館と小松代融氏によって保管されていた岩手県の稿本である。

⑤の「東北方言通信調査資料」は、小林好日氏によって1938-1941（昭和13-16）年に東北地方の約2000地点で行われた通信調査の調査票で、現在は東北大学文学部国語学研究室に保管されている。本稿では第三調査票の項目をとりあげる。

⑥の「全国方言文法の対比的研究」は、動詞・形容詞・形容動詞・名詞述語のさまざまな表現形式について、国立国語研究所の地方言語研究室が企画し、同所員と地方調査員60余名が約90地点の生え抜き話者320余名に対して行った全国調査の結果である（竹田晃子・三井はるみ（2012））。この調査結果について、報告書や刊行物は刊行されていない。調査者によって記入された調査整理票が大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所の資料庫に保管されており、今回はそれらを参照した。

3.2 国語調査委員会の第二次口語法調査資料（岩手県）におけるサエ類

④においてサエ類が回答された条目番号と調査例文は次の通りである。いずれも、「極端なものごとを提示し、より一般的な場合について類推させる」意の「極限／類推」の用法である。

(52条) 僕デサエ知ッテイルノニ、君ノ知ラナイトイウコトガアルモノカ。

(52条) アンナ大家デサエ知ラナイコトガアルノダカラ、我々ワ無理ワナイサ。

(55条) 夫ワ子供デサエ知ッテイルモノヲ……。

(62条) 今日ワ山澤サエクルモノヲ、小林ワナゼコナイダロー。

これらに対するサエ類の回答を抜き出し、表1にまとめた。併用回答を／で区切って示し、付いたり付かなかったりする場合がある語形の一部を（ ）に入れて示した。

多くの市郡にサエ、セエア／セア／セヤ／シェヤが分布するほか、デが前接した形式とニモが後接した形式がある。また、岩手県南部の江刺郡には、サゲヤなど、サエ類の変化形に他の形式が付いたとみられる形式があり、後述する図4・図5などでの宮城県のサゲに連続する様子がうかがえる。

表1 第二次口語法調査資料（岩手県）におけるサエ類

| 市郡 | 僕 ^デ サエ (52) | 大家 ^デ サエ (52) | 子供 ^デ サエ (55) | 山澤サエ (62) |
|-----|---|-----------------------------------|-------------------------|-----------|
| 九戸1 | デサへ | デサへ | サへ | サへ |
| 九戸2 | デサエ | デサエ | (該当語形なし) | サエ |
| 二戸 | デセア | デセア | デセア | サエ |
| 岩手 | デセア | デセエア | セエア | サへ |
| 盛岡 | デセヤ | デセヤ | セア／セヤ | シェヤ |
| 紫波 | デサエ | デサエ | サエモ | サエ |
| 和賀 | (デ)サエ | (デ)サエ | デサエ | サエ |
| 上閉 | (デ)サエ／サエモ | (該当語形なし) | セエ | サエ |
| 江刺 | (デ)セヤ／ (デ)セヤニモ／ (デ)サゲヤ／ (デ)サゲヤニモ | デセヤ／ デセヤニモ／ デサゲヤ／ デサゲヤニモ | デサエ／ デサゲヤ／ デサゲヤニモ | デサエ |
| 西磐 | デサエ | (該当語形なし) | (該当語形なし) | サエ |

3.3 小林好日氏による東北方言通信調査資料におけるサエ類

第三調査票・第99項目の「これさえあれば大丈夫だ」「飲みさえすれば暴れる」の2例文を方言文に翻訳した回答からサエ類のみを抜き出して地図に示した。これら2つの文におけるサエ類は、体言や連用形の後につく場合と、条件節に後接する場合がある。そこで、それぞれを分けて方言地図を作成した。

図4は、「これサエあれば大丈夫だ」のように指示詞にサエ類がついて後件に評価がくる場合で、十分条件の例文である。全域にサエ／セーが分布するが、山形県にはセーはなくサエがほとんどである。サエ／セーの専用地域は、青森県と、福島県のほぼ全域である。岩手県南部から宮城県中北部にサゲ、福島県中央部と山形県沿岸にサエガ／サガが点在する。秋田県中南部にサデ、それを挟むようにして秋田県中北部から山形県内陸にサエモが分布している。

図5は、「飲みサエすれば暴れる」のように、動詞連用形にサエ類がついて後件にその結果がくる場合で、これも十分条件の例文である。図4に比べてサエ類を回答した地点が少ないため全体に記号も少ないが、語形のバリエーションも分布も図4とほぼ同様であることが確認できる。

図6は、「これ(が)あればサエ大丈夫だ」のように、条件節に直接サエ類がつき、後件に評価がくる場合である。青森県の太平洋側と岩手県北部に計5地点、サエ／サイ／セーを回答した地点があるほかは、サエ類は回答されない。

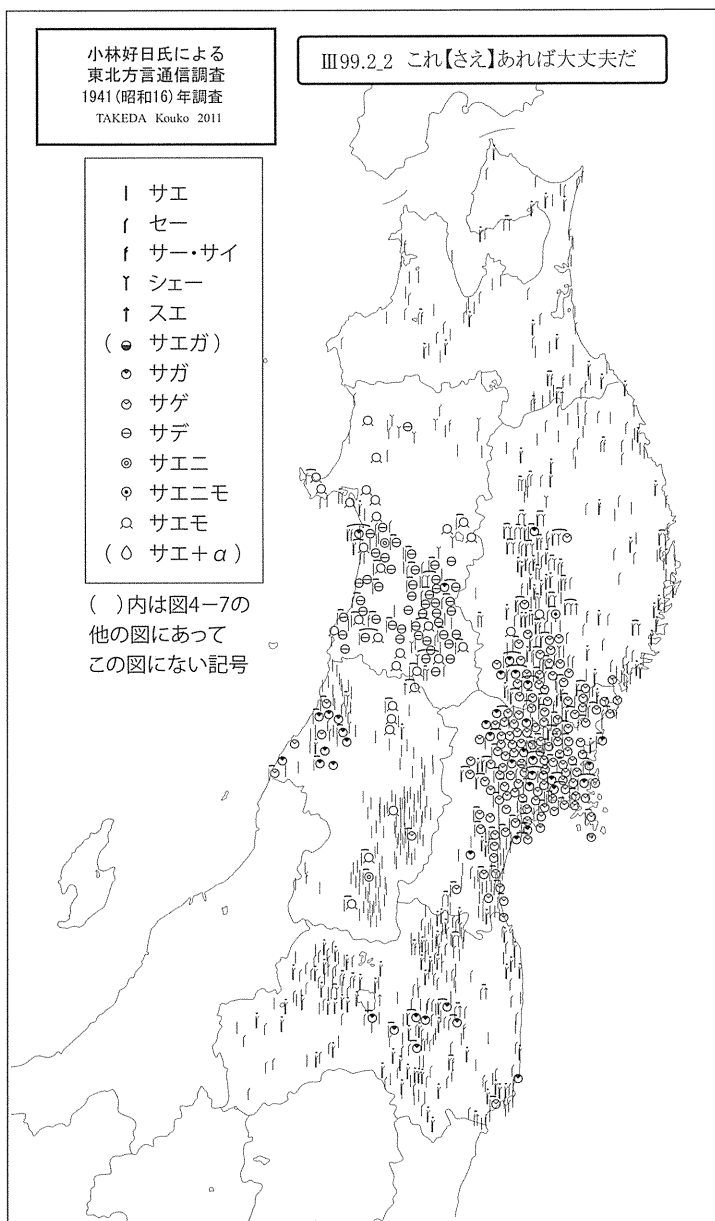


図4 小林好日資料「これ【さえ】あれば大丈夫だ」のサエ類

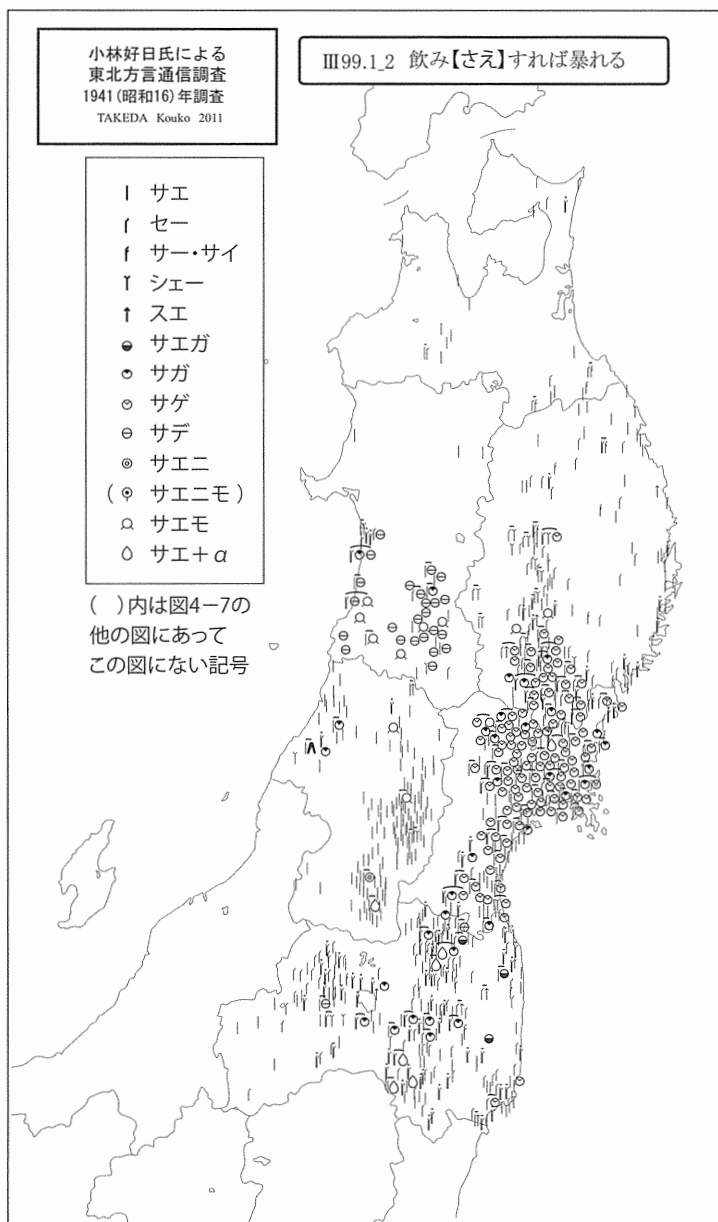


図5 小林好日資料「飲み【さえ】すれば暴れる」のサエ類

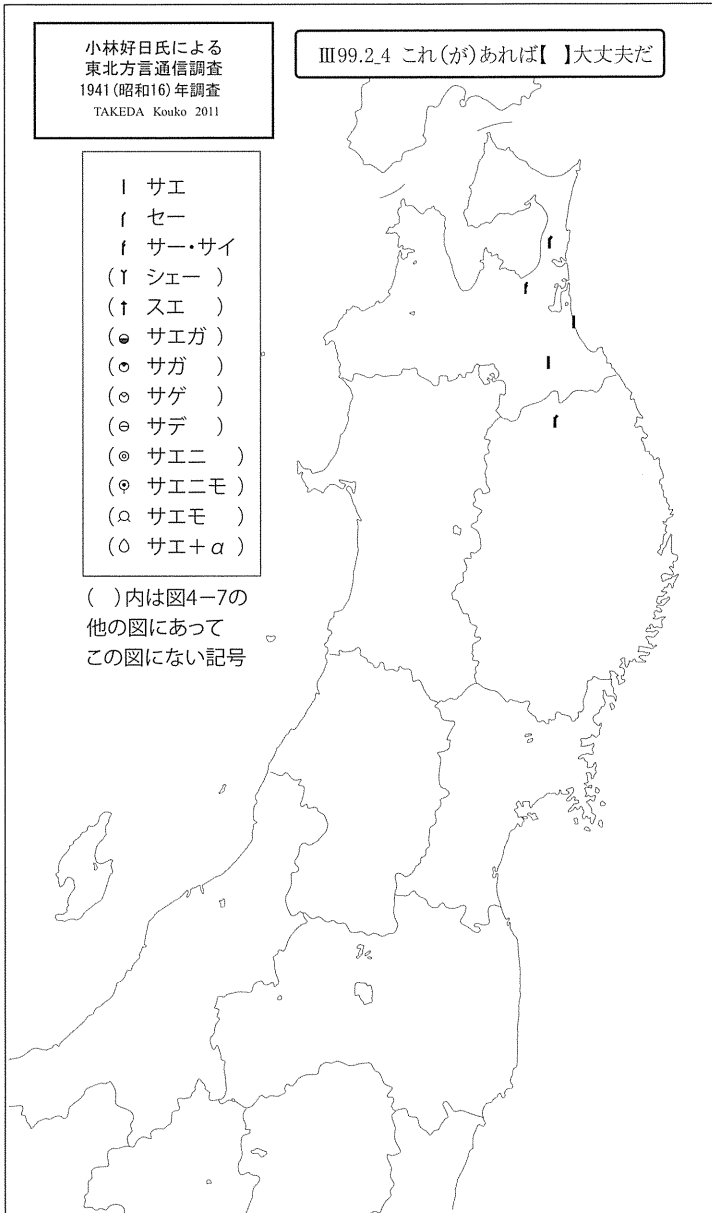


図6 小林好日資料「これ(が)あればサエ大丈夫だ」のサエ類

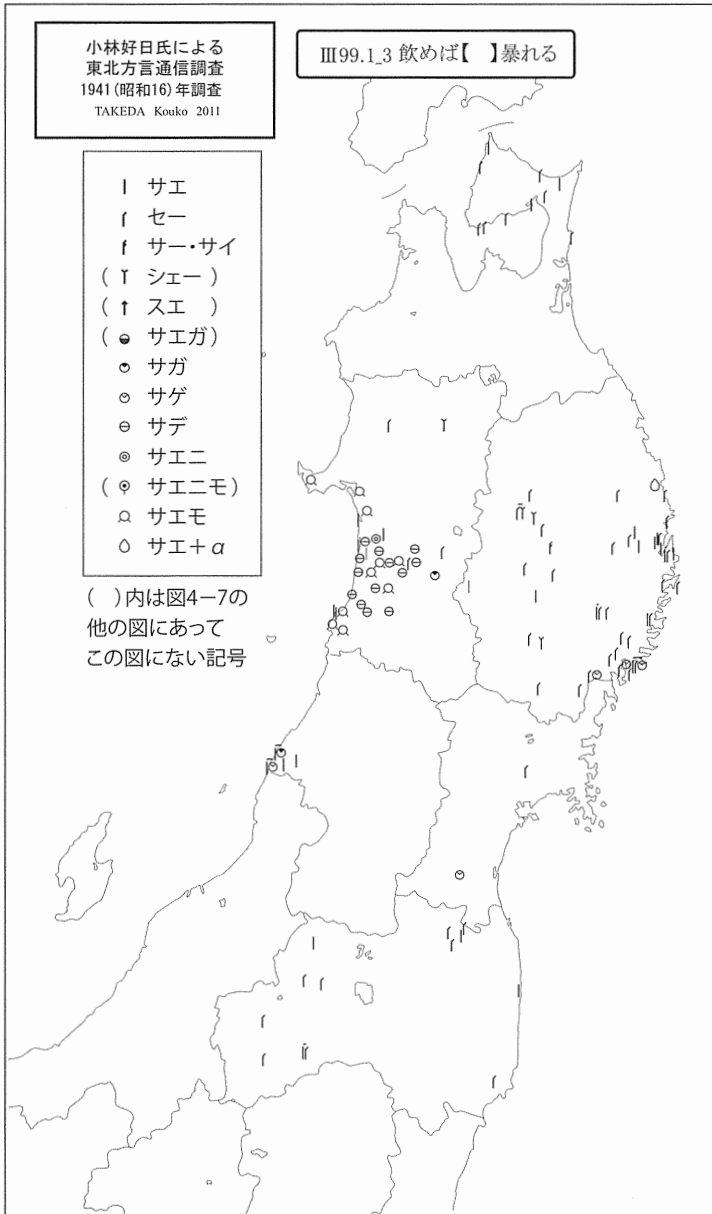


図7 小林好日資料「飲めば【さえ】暴れる」

図7は、「飲めばサエ暴れる」のように、条件節に直接サエ類がつき、後件に結果がくる場合である。図6に比べるとはるかに多くの地点でサエ類が回答されている。まとまった分布域をもつのは、青森県下北半島のサエ／セー、岩手県中南部のサエ／セー／サゲ、秋田県沿岸中南部のサデ／サエモ、山形県沿岸南部のサエ／サゲ／サガ、福島県会津地方のサエ／セーなどである。

3.4 「全国方言文法の対比的研究」におけるサエ類

この資料には、東北地方の13地点（青森県弘前市・七戸町、岩手県盛岡市・宮古市・一関市、宮城県仙台市、秋田県秋田市・岩城町、山形県山形市・藤島町、福島県会津若松市・天栄村・いわき市）において、「読みさえする（V66）」「読んでさえ（V67）」「高くさえある（A66）」「静かでさえある（A'66）」「海でさえある（N66）」に対応する語形が整理票に回答されている。これらの回答から、概当項目未記入の地点と、標準語による回答のみの地点を除いた6地点の回答語形を表2にまとめた。

表2 「全国方言文法の対比的研究」におけるサエ類

| | V66 読み <u>さえ</u> する | V67 <u>読ん</u> で <u>さえ</u> | A66 <u>高</u> く <u>さえ</u> ある | A'66 <u>静</u> か <u>で</u> さえある | N66 <u>海</u> <u>で</u> さえある |
|------------|------------------------|------------------------------|--------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|
| 青森県 弘前市 | サエ | デサエ | モ | (未記入) | (未記入) |
| 岩手県 盛岡市 | セア | デセア | シェニ (さえあるのに) | (未記入) | デセア |
| 岩手県 一関市 | サゲ | デサゲア | サゲア | デサゲア | デサゲ |
| 宮城県 仙台市 | サゲ | デサゲ | (未記入) | デサエ | (未記入) |
| 山形県 山形市 | サエ | デサエ | (未記入) | (未記入) | (未記入) |
| 福島県 天栄村 | セア(一) | デセア(一) | セア(一) | デセア(一) | デセア(一) |

これによると弘前市と山形市ではサエ、盛岡市と天栄村は連母音が融合したセア、一関市と仙台市ではサゲ／サゲアが回答されている。特に仙台市の整理票には次のような例文も記載されており、サゲが一般的な形式であることがわかる。

○ヨミサゲ スッド ワガンベ。(読みさえすると、わかるだろう)

○ヨンデサゲ イッド イー。(読んでさえいれば良い)

4. 東北方言におけるサエ類の特徴

以上、全国分布資料における東北方言のサエ類、東北方言を詳細に調査した資料におけるサエ類について、語形のバリエーション、統語的特徴、地理的分布を確認してきた。まとめると次のようになる。

- (1) 語形のバリエーションには、サエ／サイと、連母音が融合したセー／セア／セャ／サー／シェー／スエのほか、サエが変化した形にガ／ゲなどが付いたサガ／サゲア／サゲ／サケとデが付いたサデ、サエにモ／ニモが付いたサエモ／サエニモがある。サガ類のものの形ははっきりしないが、サエガの形が福島県にみられることから、サエにガ／カが付いた形が原型と推測される。
- (2) 語形の地理的分布は、全域にサエ／セーの類が分布する。特に山形県には連母音が融合したセーの類はほとんどない。サガ類は岩手県南部から宮城県の旧伊達藩領と山形県沿岸部と福島県中央部、サデは秋田県南部、サエモはサデを囲むように秋田県中部と秋田県南部から山形県内陸にかけて分布する。
- (3) 十分条件の調査結果が多いが、その中で統語的特徴をみると、条件節の体言・動詞連用形に付く場合と、条件節に直接付く場合とがある。
- (4) 十分条件におけるサエ類の地理的分布は、条件節の体言・動詞連用形に付く場合はほぼ全域で用いられるが、条件節に直接付く場合には地域差がある。後件に評価がくる場合、条件節にサエ類が直接付くのは、青森県太平洋側から岩手県北部にわずかに点在する。一方、後件に前件の事態が起こった結果がくる場合、条件節にサエ類が直接付くのは、青森県下北半島のサエ、岩手県中南部のサエ／サゲガ、秋田県沿岸中南部のサデ／サエモ／サエ、山形県沿岸南部のサエ／サゲ／サガ、福島県会津地方のサエなど、比較的まとまった分布がある。

5. おわりに

本稿では、東北方言における極限のとりたて助詞サエ類について、全国分布資料と東北方言の各種資料を通じて、語形のバリエーションとその地理的分布の様相を明らかにした。

今後の課題として、まずは用法の把握があげられる。統語的特徴を確認できる調査結果は十分条件のものが多く、本稿では限定／類推と添加の用法の特徴は確認できなかった。これらの詳細は別の面接調査や分布調査が必要である。また、サエの変化した形にガ／カの付いたサガ／サゲなどの形については、もとの形を探ると同時に、同様にサエガ／シャガ／セガなどが用いられる九州方言（図1・図2参照）との比較対照が課題となる。

引用文献

- 国立国語研究所 編（1981）『方言文法資料図集(1)』国立国語研究所
国立国語研究所 編（1989）『方言文法全国地図』第1集、財務省印刷局
竹田晃子（2003）「小林好日氏による東北方言通信調査」『東北文化研究室紀要』44、東北大学
竹田晃子（2008）「明治期国語調査委員会による音韻口語法取調の概要と第2次調査資料の分析」（『日本方言研究会第87回研究発表会発表原稿集』2008/11/1）
竹田晃子・三井はるみ（2012）「『全国方言文法の対比的研究』調査の概要とそのデータ分析—原因・理由表現を中心に—」『国立国語研究所論集』（投稿中）
平山輝男ほか編（1992）『現代日本語方言大辞典』第1巻、明治書院
三井はるみ（2003）「極限のとりたての地理的変異」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版